

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

博士論文要旨

| | |
|--|---|
| 看護学研究科看護学専攻 基盤・実践看護学 成人看護 分野 | 学籍番号 ND12004 氏名 高田 幸江 |
| 論文題目 | レシピエントの体調変化にともなう生体腎移植ドナーの腎提供に対する認識 ～そのドナーへの影響とレシピエントへの影響～ |
| <p>【背景】 日本では1997年に臓器移植法が制定されたが、提供数が伸びない現実があり、腎移植は生体移植が8割を占める。腎提供後のドナーの腎機能は、片腎となり約30%程度低下するため生涯にわたる長期的なフォローアップを要すが、現状は不十分である。国内外の文献からは移植結果が不成功だったドナーは、厳しい身体的反応や抑うつなどの精神反応があるという報告が散見された。生体腎移植ドナーは、レシピエントの健康状態に影響を受けながら、腎提供の意味づけをしており、レシピエントの体調変化によって、その意味づけが変化することと、意味づけの変化により、ドナーの心身に影響が生じる可能性があるが、実態は明らかになっていない。</p> <p>【目的、および看護上の意義】 目的は、レシピエントの体調が変化した生体腎移植ドナーの腎提供に対する認識を明らかにし、その認識がドナー自身に与えている影響と、レシピエントに与える影響を明らかにすることである。ドナー支援は生体移植に依存している日本の移植医療の重要な課題である。レシピエントの体調変化では、レシピエント死亡や提供腎廃絶など、極めて重大な体調変化が生じる際の生体腎移植ドナーの認識とその影響が明らかになることが期待される。これにより、従来施設毎の裁量に任されていた腎提供後のドナーに対して、意図的に関わるべき時期が明らかとなり、生体腎移植ドナーの長期的看護支援の方略を検討することが可能となる。</p> <p>【研究方法】 研究デザインは質的記述的研究、対象はレシピエントの体調が変化(拒絶反応、回復、腎機能低下、提供腎廃絶(再透析導入)、死亡など)した生体腎移植ドナーとレシピエントである。関東4病院の移植コーディネーターと看護師に対象候補者選定と研究説明書の手渡しを依頼し、返信のあった者を対象とした。約1時間の半構造化面接調査を行ない、内容はICレコーダーに録音後、逐語録作成し、グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。倫理的配慮として、候補者の身体・心理状態と調査負担の検討は、対象選定を行う看護職者の臨床判断を重視した。悲嘆を考慮し、レシピエント死亡のドナーは、死別後1年以上が経過していることとした。</p> <p>【結果】 調査期間は2014年4～11月、生体腎移植ドナー5名、レシピエント5名から協力を得</p> | |

た。ドナー面接の分析から 13 のカテゴリー、レシピエント面接の分析から 9 のカテゴリーを抽出した。すべてのドナーカテゴリーに関連する最上位のコアカテゴリー、『自分にとっての腎提供の意味を描きかえ、重ねていく』を見出した。ドナーは、移植後のレシピエントの体調に強い関心を寄せており、体調変化の認知によってドナーに変化が生じた。体調変化は、ドナーのその後の変化から、＜改善＞＜一時的悪化＞＜決定的悪化＞の 3 側面に分けられた。特にドナーは、レシピエント死亡、提供腎廃絶などの体調の＜決定的悪化＞を認知すると、不安、落胆などを経験し、体調も一時的に悪化した。更に、ドナーの腎提供の意味づけは否定的になるが、意味づけが否定的な状況が継続することで、ドナーはこれからの自分の展望が退行的になることを自覚する。ドナーは、意図的に腎提供の肯定的側面を探し確認することで、腎提供に対する意味づけを肯定的にした。肯定的な意味づけの付与により、これからの自分の展望を発展的に捉えることが可能となった。ドナーの腎提供の意味づけは、レシピエントの体調変化にともない、腎提供までや腎提供後の道のをその都度振り返り、何度も立ち戻ってなされるものであり、今まで捉えていた意味をも踏まえ、自分にとっての新たな意味を重ねていくものであった。ドナーとレシピエントは相互に強い関心を寄せており、レシピエントの体調変化を契機に、互いの変化を認識することで相互に影響を及ぼしあっており、その過程は連続して形成されていくものであった。

【考察】 生体腎移植ドナーの腎提供の体験には、3 段階の意思決定プロセスが含まれている。それらは、ドナーが自分しかいないことを確認するまでの“選択までのプロセス”、自分しかいないことを確認し腎提供術に進むまでの“選択に基づく行為のプロセス”、レシピエントの体調の認知に影響を受けながら腎提供の意味づけを行なう“選択の意味づけのプロセス”である。このことより、提供後にドナーの行なう「腎提供の意味づけ」を意識した術前からの意思決定支援や、レシピエントの体調変化時のドナーへの意図的アクセスなど、ドナーとレシピエントの相互の影響を踏まえた上で、生体腎移植ドナーの生涯に渡る全人的な看護支援が必要である。

【限界と課題】 対象者数が少ないことが本研究の限界であるが、移植件数自体が少ない事、免疫抑制剤進歩で移植成績が向上している現在において、レシピエント死亡、提供腎廃絶などの特徴的な事例を対象とできており、学術的価値が高く、報告する意義を十分有すると考える。今後は、ドナーとレシピエントの関係性に着目した研究や、ドナーを継続的に支援する看護支援モデル開発研究、看護介入の効果を測定する研究などが課題となる。

【結論】 レシピエントの体調変化にともない、ドナーの心理、体調、腎提供の意味づけ、これからの自分の将来像は変化する。提供後のドナーは片腎となるため健康状態の把握が重要であるだけでなく、心理・社会的にも生涯に渡る健康が保障される必要が有る。

博士学位論文審査結果の要旨

氏 名：高田 幸江（学籍番号 ND12004）

専 攻：基礎・実践看護学分野

論文題目：レシピエントの体調変化にともなう生体腎移植ドナーの腎提供に対する認識

－そのドナーへの影響とレシピエントへの影響－

The Recognition of Kidney Donation by Living Kidney Donors That Accompanies Changes in the Recipients' Physical Condition: Its Influences upon Donors and Recipients

指導教員：福田 美和子（東邦大学看護学部准教授）

2015年2月9日17時30分～19時、村岡宏子（主査）、平田松吾（副査）、高木廣文（副査）、福田美和子（副査）の4名からなる審査委員会が、東邦大学看護学部403セミナー室で開催され、学位論文に関する審査が行われた。以下、審査の概要について述べる。

本研究の目的は、レシピエントの体調が変化した生体腎移植ドナーの腎提供に対する認識を明らかにし、その認識がドナー自身に与えている影響と、レシピエントに与える影響を明らかにすることである。ここで、本研究が焦点を当てている腎提供に対する認識とは、レシピエントの体調変化によって、ドナーが腎臓を提供したことについて自身にとってもつ意味が変化し、その変化した意味にもとづきレシピエントに接することによりレシピエントに影響を与えているという、両者のダイナミズムを含んだ事象をさす。この事象についてシンボリック相互作用論に依拠し、レシピエントの体調変化によるドナー自身への影響と、その影響を受けたドナーが変化することを察知したレシピエントにもたらす影響にせまったことは、オリジナリティが高い。

研究デザインは質的記述的研究である。調査期間は2014年4月から11月で、調査場所は関東4病院であった。対象はレシピエントの体調が変化〔拒絶反応、回復、腎機能低下、提供腎廃絶（再透析導入）、死亡など〕した生体腎移植ドナー5名とレシピエント5名であった。約1時間の半構造化面接調査を行ない、内容はICレコーダーに録音後、逐語録作成し、グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。倫理的配慮として、候補者の身体・心理状態と調査負担の検討は、対象選定を行う看護職者の臨床判断を重視した。悲嘆を考慮し、レシピエント死亡のドナーは、死別後1年以上が経過していることとした。東邦大学看護学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：25006）ほか、対象候補者紹介施設指定の倫理審査会の承認を得て実施された。後述する具体理論は、レシピエントの体調変化がバラエティに富んだ状況に基づく豊かなデータから抽出しており、十分な理論的サンプリングがなされていると評価できる。ただし、ドナーとレシピエントがペアでないことは研究の限界であるが、体調変化が死亡の場合は絶対的にペアのデータ収集は不可能であり、これらを勘案すると、ペアに近い状況を説明しうるデータ収集ができていると評価する。

ドナー面接の分析から13のカテゴリー、レシピエント面接の分析から9のカテゴリ

一を抽出され、すべてのドナーカテゴリーに関連する最上位のコアカテゴリー、『自分にとっての腎提供の意味を描きかえ、重ねていく』が見出された。これを説明する具体理論は以下のように示された。ドナーは、移植後のレシピエントの体調に強い関心を寄せており、体調変化の認知によってドナーに変化が生じた。体調変化は、ドナーのその後の変化から、<改善><一時的悪化><決定的悪化>の3側面に分けられた。特にドナーは、レシピエント死亡、提供腎廃絶などの体調の<決定的悪化>を認知すると、不安、落胆などを経験し、体調も一時的に悪化した。更に、ドナーの腎提供の意味づけは否定的になるが、意味づけが否定的な状況が継続することで、ドナーはこれからの自分の展望が退行的になることを自覚する。ドナーは、意図的に腎提供の肯定的側面を探し確認することで、腎提供に対する意味づけを肯定的にした。肯定的な意味づけの付与により、これからの自分の展望を発展的に捉えることが可能となった。ドナーの腎提供の意味づけは、レシピエントの体調変化にともない、腎提供までや腎提供後の道のをその都度振り返り、何度も立ち戻ってなされるものであり、今まで捉えていた意味をも踏まえ、自分にとっての新たな意味を重ねていくものであった。ドナーとレシピエントは相互に強い関心を寄せており、レシピエントの体調変化を契機に、互いの変化を認識することで相互に影響を及ぼしあっており、その過程は連続して形成されていくものであった。この記述は、レシピエントの体調変化に伴い腎提供までや腎提供後の道のをその都度振り返り何度も立ち戻ってなされるドナーの認識の変化過程と、それに応じたレシピエントとの相互に影響しあうプロセスを説明するものであり、オリジナリティが高く説得力があると評価した。特に、提供腎廃絶やレシピエントの死亡といった決定的悪化をドナーが認識すると、一時的に否定的にとらえるが、腎提供の肯定的意味を探し確認する作業を通じて、これからの自分の展望を発展的にとらえようとするプロセスが浮き彫りとなったことは、価値ある結果と評価した。

レシピエントの体調変化によって、ドナーの心理、体調、腎提供の意味づけ、これからの自分の将来像は変化する。腎提供の意味づけは、レシピエントの体調変化にともなって、腎提供までの道のをや腎提供後の道のをそのたびに振り返り、立ち戻ってなされるものであり、今まで捉えていた腎提供の意味をも踏まえ、自分にとっての新たな意味を重ねていくものとして示された。腎提供後のドナーは片腎となるため健康状態の把握が重要であるだけでなく、心理・社会的にも生涯に渡る健康が保障されるための全人的な看護支援が必要である。これを踏まえ、本結果で見出された具体理論をもとに、腎提供を決めたあとも続くドナーの意思決定のありように関連し、看護支援モデルについて提言が述べられたことは、移植医療・看護のありかたを考える上で極めて重要な示唆を与えてくれるものと評価した。

論文表題に用いている「認識」という言葉がもつ意味が確認され、結果との整合性からカテゴリーの一部修正および論文題目の微修正が必要であると議論されたが、全体的には優れていることが評価された。

審査委員会は、申請者との質疑応答を行った後、以上の評価に基づき、本論文は学位論文としてふさわしい水準にあると認めた。申請者は看護学の発展に寄与しうる研究活動を行う研究能力と豊かな学識を有し、学位規定第2条に定める博士（看護学）の学位を授与するに値すると認め、論文審査ならびに最終試験に「合格」と判定した。